



## IAC会報誌 「風流」の読者の皆さまへ

駐日セルビア特命全権大使  
ネナド・グリシッチ



第二十八号



### 基本情報

セルビアはヨーロッパのバルカン半島に位置し、人口約九百万、面積八万八千九平方キロメートル、気候は大陸性気候、首都はベオグラード（人口は百六十人以上）です。その宗教はセルビア正教徒が大部分を占め、その他カトリック、イスラム教徒もいます。公用語はセルビア語（キリル文字）、通貨はディナールです。国内最長の川はドナウ川（国内の長さ五八八キロメートル）で国内最高峰はジエラヴィツア山（二六五六メートル）です。

### 観光地

最も人気の観光地は都市では、ベオグラードとノヴィ・サド、地方では高原リゾートのコパオニケビズラティボル、温泉ではブルニヤチュカ・バニニヤとソコバニヤです。

### 田舎観光

セルビアの田舎に滞在すると、宿の人たちはホスピタリティと心の温かさに感動します。旅行者は家族であるかのように歓迎され、ほかの国では体験できない優しさと笑顔に出会います。田舎の家庭的な部屋に滞在すると、ホテルの宿泊では味わえない心地よさを感じられます。

### 温泉・保養リゾート

セルビアには千ヶ所を超える冷泉、温泉、鉱泉があります。五十三ヶ所以上の温泉リゾートがローマ時代から知られており、飲泉や薬泉に入浴するなどの温泉療法が使われてきました。病気治療用の温泉以外に、気候や場所が保養に適しているために健康リゾートとして指定された保養地もあります。

### セルビアについて

こんにちは。セルビア共和国大使のネナド・グリシッチです。私は一九七〇年代に学生時代を東京で過ごしました。その後、三十年の歳月が流れ、こうして外交官として再来日できることをとても感慨深く思います。

セルビアと日本の国家間及び民間の友好関係のさらなる進展のために、この日本でセルビア共和国の代表として任務を全うすることは、大変光栄であるとともに、大きな責任と高いモチベーションを感じております。

### セルビアと日本の関係

さて、両国民の交流が始まつたのはいつからでしょうか。正式な資料として残されているのは、両国間で初めて交換された新書がございます。一八七八年七月十三日のベルリン会議でセルビア王国の独立が承認されると、当時の国王ミラン・オブレノヴィッチ一世は戴冠式が行われた一八八一年三月に、自身の即位を伝える親書を日本の明治天皇に送り

### 修道院

中世におけるセルビアの修道院の建築様式は変化に富んでいます。これらの修道院の規模、ファサードの装飾、彫刻作品はロマネスクの影響が感じられます。

### 4つの世界遺産

セルビアでは多種多様な料理が楽しめます。特にバルカン半島（旧ユーゴスラヴィア）、地中海（ギリシャ）、トルコ、中央ヨーロッパ（オーストリア、ハンガリー）から多くの影響を受けています。代表的な国民食はブリエスカヴェツ（牛肉のハンバーグ）、チエヴァ・アチャ（ひき肉のグリル）、サルマ（ロールキャベツ）がよく飲まれ、なかでもブランから作られる「ジュリヴァ・ヴィツア」は一番人気です。最近では世界各国でセルビア料理を楽しむことができます。

### セルビア料理

セルビアでは多種多様な料理が楽しめます。特にバルカン半島（旧ユーゴスラヴィア）、地中海（ギリシャ）、トルコ、中央ヨーロッパ（オーストリア、ハンガリー）から多くの影響を受けています。代表的な国民食はブリエスカヴェツ（牛肉のハンバーグ）、チエヴァ・アチャ（ひき肉のグリル）、サルマ（ロールキャベツ）がよく飲まれ、なかでもブランから作られる「ジュリヴァ・ヴィツア」は一番人気です。最近では世界各国でセルビア料理を楽しむことができます。



地図：セルビア大使館提供

# 世界の大学——知をめぐる巡礼の旅

これまで一〇五ヶ国を訪れ、二五〇の海外の大学を訪問した。学生時代からバツクバツカ一だったので、大学は最初、旅先で自然に目に入るものとして私の前に現れた。この時期に訪れた大学で印象深かったのはバナーラス・ヒンズー大学(インド)だ。ガンジス川沿岸の聖地バナーラスの旧市街を抜け、喧騒の街路を歩けば正門に辿りつく。門の中は広闊な別世界で、巨樹の下で鳥の声が聞こえた。

大学職員になつてからは、海外の大学の組織と運営に興味を抱くようになった。アラスカ大学で一年間仕事をしたのは職員になつて十年を経た頃だ。そこで私は留学生を扱う部署の所属となり彼らと親しくふれ合つたが、考えてみればそれが今仕事の原点になつていている。アラスカ滞在中、北欧の大学を多く訪問する機会に恵まれた。コペンハーゲンで車を借りて、紹介状一枚を頼りにスカンジナビア半島を大学を巡りながら一周した。メールもインターネットも無かつた頃の話だ。アラスカから帰国した私に国際交流センターへの異動が待っていた。

公的な出張では事前にアポイントを取るが、私的な旅行の中では訪問する場合はほとんどアボなし。それでも多くの国では大学に自由に出入りできる。出入りが比較的不自由だったのはロシア、イラン、ミャンマー、イスラエル、北朝鮮だ。最も厳しかったのは北朝鮮で、一ヶ月以上前からの金日成総合大学の訪問を申請したが、許可の連絡を受けたのは入国の前日、校内では美しい女性に案内され、限られた施設のみ見学が許された。

湾岸諸国の場合、入れるのは男子のエリアに限られ、女子の教室棟や生活圏を見せてくれることは少ない。UAEのザイード女子大学では学生にレクチャーをする機会を設けていた。それで、女の園の校内に入ることができた。学生はペールを脱いで素顔をさらし、リゾート・ホテルのような内装で大きな人工池があつた。

大学の使命は学問や知識の集積と深化、そして対話を繰り返しながらそれを伝播させることだと考える。現代史に翻弄されながらも存在を維持し、その使命を実現しようとする大学がある。ある曰ナショナリズムの象徴として国威発揚

を喧伝した大学が、その翌日には反体制的な自由と解放のシンボルとなることもある。たとえばハンガリーのカール・マルクス大学。権威の象徴だったマルクス像が、ゴルヴィヌス大学と名前を変えた今ではイデオロギーとは無縁の「愛着」の対象としてその存在を維持している。撤去せよという声の高まりに反対したのは、他ならぬ改革開放派の人々であつたという。

いい大学はいい学生街に囲まれている。そんな学生街の古書店を渉猟し貴重な一冊にめぐり合うのも「知」との出会いある。知識の時代から智慧の時代へ、急激な変遷を迫られた大学の現代的な使命は、さまざまなる形の「知」が自由に大らかに交錯する時間・空間・環境を保障することだろう。

(文・高橋史郎・IAC会員)

早稲田大学 アジア太平洋研究センター 事務長



▶金日成総合大学  
(北朝鮮)



◀バナーラス・ヒンズー大学  
(インド)



▲シェズイゴン パゴダ

翌朝、黄金に輝くシュエズイゴン・パヤ(パゴダ)を筆頭に、いかにも日本人といわれるかもしれないが、バガン一日観光を敢行した。

ミャンマーを南北に流れる大河エーヤルディ(イラワジ)川中流域の広大なる東岸平野に一世紀に成立したこの仏教王国は十一世紀アノーヤター王時代に最盛期を迎え、幾世紀続いた栄華も十四世紀にはモンゴルの侵攻で滅び去ってしまった。四十二平方キロ、灌木が点在し、地平線が見渡せる平野に三千近く大小様々な寺院・仏塔が今はおその姿をとどめている。

アーナンダ寺院、マーハボディ・パヤ、タビインニュ寺院と見どころを忙しく訪ねたが、歴史的背景・建築様式等を事前に調べ、遺跡群の前に佇めばより一層の感慨がわいてくるに違いない。欧米人の観光客が多く見受けられ、特に若い観光客はレンタ・サイクルで何日も何日も遺跡巡りをするようだ。遺跡群はすべて来生の極楽浄土を夢見て、バガン王国の王族貴族・老若男女が競つて財を投じ寄進されたものだ。現在では国自ら修復する主要な遺跡以外、現存するすべての遺跡に番号をふり、信心深い篤志家を募りそれらの修復をまかせている。

一説によると灌木と赤茶けた上のバガンもかつては、緑の森におおわれていたそうだ。宗教的情熱から寺院・仏塔を建設した結果、緑の大それたが失われてしまつたという。もしそれが事実なら、宗教的情熱も度を越せば過ぎたるは及ばざるがごとし、バガンの遺跡群は千年を超えて現在に至り、人間の業の深さを戒める教えに違いない。それにしてもバaganの夕景は極楽浄土そのものだった。

(文・川崎知 IAC理事・ソフィア株式会社代表取締役)

バガン  
仏教王国(ミャンマー)の宴の跡

後編



▲アーナンダ寺院

IAC理事の川崎が二〇一三年年十二月にミャンマーのバaganを訪れた感想を二回に分けてご紹介しています。前号ではヤンゴンの入国手続き、そのあと、空路で夕刻のバaganへの到着が伝えられました。今回は、いよいよバagan王国の一日観光です。

►サラマンカ大学(スペイン)



▼ナポリ・オリエンターレ大学図書館(イタリア)



▲ナポリ大学図書館(イタリア)



▲ヘブライ大学(イスラエル)

写真：高橋史郎（IAC会員）



▲サンクト・ペテルブルク大学(ロシア)



▲シェフченコ記念キエフ大学(ウクライナ)



▲世界経済外交大学(ウズベキスタン)  
学生食堂前の調理風景

## 各国の個性が光る大学



▲スルタン・カブース大学(オマーン)



▲ザイード女子大学(U A E)

## 事務局便り

►前号の「今年こそ、ラトビアへ！」の呼びかけに応えてくださったように、会員のおひとりがラトビアの夏至祭の料理の取材のため、6月にラトビアを訪問予定です。駐日ラトビア大使館からも渡航滞在にあたり、ご支援や提案をいただいております。帰国後は、報告会を兼ねて料理のイベントなども企画し、ラトビア体験をうかがいたいです。行ってらっしゃいませ！

►各国のワインを楽しむ企画もスタートします。まずは南アフリカのワイン会を5月23日に、その後、6月には、ワールドカップで注目されるブラジルのワインを紹介予定です。特にブラジル・ワインのおいしさを、この機会にお試しください。詳細はIACのFACEBOOKで随時掲載します。お電話での問い合わせもお気軽にどうぞ。

TEL 03-5426-2047 Facebook <https://www.facebook.com/iactokyo>

►2月15日に予定していた「食から知る民族文化13回ブルキナファソ」は、想像以上の積雪で、ブルキナファソ大使ご夫妻にお越しただけず、雪を押してご来場された皆さんをがっかりさせました。そんな中、一等参事官のバンジャミン・ナナさんが到着され、さらにブルキナファソの留学生、アーティストも加わり、楽しい交流会が実現しました。ブルキナファソの食の企画は、再調整して秋ごろ、開催予定です。

(事務局：金屋輝美)



▲バガンの夕暮れ



写真：川崎知（IAC理事）

会員を募集しています

一緒に実現する  
IACの文化交流

- 会員として活動に参加してください。  
年会費:個人1万円 法人5万円(一口)
- 「風流」の同行取材にご協力いただける方を募集しています。
- 広告を募集しています。  
「風流」やIACホームページへの広告で、貴社、貴店のPRとともにIACの活動をサポートしてください。



## こんにちは、大使館【第17回】アゼルバイジャン

AZƏRBAYCAN RESPUBLİKƏNİN BƏRİYƏTİ  
アゼルバイジャン共和国大領事  
EMBASSY OF THE REPUBLIC OF AZERBAIJAN



アゼルバイジャンは「火の国」の意味

石油が国の経済支えてきた。だがこれからは脱石油経済目指す  
初の通信衛星打ち上げも

20世紀はじめにはイスラム圏初の民主主義の国会も

大使は日本語の達人 父が石川啄木研究

ゾルゲ、ロストロポービッチはバクー生まれ

今も「ゾルゲ通り」残る

夢はアゼルバイジャンの横綱誕生



IACの文化交流の強力なパートナーは、  
各国在日大使館です。  
それぞれの国について「食」や「民族芸術」の  
シリーズとは別の切り口でこの紙面から紹介  
します。

このコーナーは引き続きIAC会員の取材で構成します。  
ご興味がある方は、事務局に奮ってご応募ください。

◀アゼルバイジャン共和国大使館 特命全権大使  
Gursel Qudrat oglu ISMAYILZADA  
(ギュルセル・グドラト・オグル・イスマイルザーデ)さん



▶ワインの特産地と  
しても有名、伝統的な  
ボトルカバーも美しい



▲アゼルバイジャン製絨毯で  
織り上げられた第三代大統領  
ハイダル・アリエフ氏の肖像

コーカサス地域の南部、カスピ海添いにあるアゼルバイジャン共和国。面積は日本のおよそ4分の1の8万7,000平方キロメートル、人口1938万人(2013年)と日本に比べればコンパクトな印象だ。その大使館は目黒区の閑静な高級住宅地にある一軒家だ。

ギュルセル・イスマイルザーデ大使は発音、語彙、表現力、文法面で完成された日本語の使い手。100人を越える東京の駐日大使の中でもおそらくトップクラスではあるまいか。それともうも通算10年を超える留学(筑波大学、上智大学)と日本勤務での経験、学習に裏づけされたものに違いない。同国外務省のジャパンスクールの第一号だ。日本への関心の始まりは考古学者だった父親が石川啄木が好きだったことから、大使も日本に関心を持つようになったという。

——アゼルバイジャンといえば日本人はまず石油を想起しますが?  
大使「わが国は油田開発は19世紀中ごろに始まり、世界でも有数の歴史を誇ります。そもそもアゼルバイジャンという名は火の国という意味なのです。ゾロアスター教(摔火教)もこの地から起こりました。ノーベル兄弟もアゼルバイジャンに油田開発の投資をしたこともあるのです。一時はわが国のGDPの95%は石油に依存していましたが、2013年では50%に下がっています。石油は有限な資源であり、我々も脱石油経済を目指し、農業、IT、再生可能エネルギー、製造業などに力を入れています。2013年にはわが国初の通信衛星をアメリカの会社により打ち上げました。」

——民主主義の歴史も古いものがあるそうですが?

大使「わが国はロシア帝国に組み込まれてきましたが、ロシア革命きっかけに独立。1918年から1920年までのあいだイスラム圏で最初の国会を開設した民主主義国だったんです。しかしロシア赤軍の占領で解散しました。民主主義の歴史は古いのです。その後ソ連邦の解体により1991年独立しました。」

——日本人はアゼルバイジャンといえば石油の次にスパイ・ゾルゲとそしてチェリスト・ロストロポービッチの名前が浮かびます。

大使「ゾルゲはアゼルバイジャン人ではありませんが、石油開発技術のドイツ人の父親とロシア人の母親と間にバクーで1895年に生まれています。今もわが国民から尊敬され、博物館やゾルゲ通りがあります。ロストロポービッチはロシア人ですが、1927年バクー生まれです。親日家でした。バクーは石油開発のおかげで19世紀後半から国際都市となり、ジャズなどの西洋音楽も盛んでした。2015年にはわが国で初のヨーロッパ五輪が開かれ、40ヶ国が参加します。アゼルバイジャンはレスリング、柔道が強いです。これからはそんななかのチャンピオンを選んで日本の相撲界に送り込み、横綱を狙わせたいですね。そうするとアゼルバイジャンの知名度が日本でもうんと上がりりますね。」

大使の夢は広がっている。



▶民族衣装で民族楽器を  
奏でる音楽家トリオ

文：山下靖典(IAC顧問)  
写真：藤倉明治(IAC会員)



◀Kelagayi  
(上質の柔らかい綿で  
作れた四角形の  
スカーフ)でう  
アゼルバイジャン  
大使館の一等書記官  
Narmin Asalanova  
(ナルミーナ・  
アスラノヴァ)さん



▶Charigs  
昔、男女ともに  
はいていた  
伝統的な履物  
(サンダル)

### 沖縄の精霊のおはなし。

沖縄の精霊  
キジムナーと男の子  
の友情のお話。



タイトル・作者  
「キジムナーと  
カミジュ」  
たまもとさゆり

ご購入はコチラから▼  
<https://www.o-kyohan.co.jp/>

### 不思議大好き

ソフィアは中近東、中央アジア、  
アフリカの旅行を得意としています。

不思議大好き直通電話 TEL: 03-5292-7858

FAX: 03-5272-6020

SOPHIA ソフィア 株式会社 東京都知事登録旅行業 第3-4240  
東京都新宿区大久保1-1-45

広 告